

城下町成立の頃②

慶長18年(1613)、姫路城主の池田輝政が病没し、嫡男利隆が四十二万石で跡を継いだ。西播三郡(宍粟、佐用、赤穂)十万石は輝政の次男忠継(岡山藩主)の所領に加えられた。その二年後の元和元年(1615)、忠継が没し、妻子がなかったため、弟(三男)の忠雄が継ぐことになるが、西播三郡は忠雄の願いが受けられ、その弟三人に分与することになり、輝澄(四男)に宍粟三万八千石、政綱(五男)に赤穂三万五千石、輝興(六男)に佐用二万五千石が与えられた。幕府は、家康の外孫であることを考慮して、それぞれ一家を興させた。

輝澄は慶長9年(1604)に姫路城で生まれ、幼名を松千代と名乗った。同14年(1609)駿府城において徳川家康に謁し、松平姓を授けられると、元和元年(1615)には石見守に任じられ、宍粟郡を領して独立した大名となった。

初代藩主となった松平石見守輝澄は、戦国時代に出雲の尼子氏が砦を構えたとされる山崎の地に屋敷を造営することを決めた。山崎は宍粟郡の扇の要のような地理的好位置にあり、木下勝俊の「新町申付け」以来、最上山の山裾を中心に商工業者の居住する町並みができつつあった。

このため、武家屋敷は屋形の三方を取り巻くように配置され、町屋敷との間には外濠を設け、土塁や石垣を築いて境界を厳重にした。

ちょうど再来年の2015年が、宍粟藩が成立した元和元年から四百年の節目の年となる。

元禄12年(1699)に書かれた『播州宍粟郡守令交代記』には「ここにおいて工商の人來たり集まり、町数、漸次広がり、ついに十町に及びぬ」と当時の町場の広がりや賑わいが記されている。

輝澄時代のものとして残っているのが青蓮寺である。このお寺は元々姫路城下にあったもので、元和4年(1618)この地に移ったとされる。輝澄の祖母蓮葉院(家康の側室西郡の局)の菩提寺であり、本堂の西側には御廟屋がある。また、輝澄の母督姫(家康の子)良正院と輝澄の菩提も同寺で申している。寛永8年(1631)輝澄の弟

政綱(赤穂藩主)が没し、その弟輝興が佐用から赤穂に転封され、佐用郡が輝澄に加封されたことにより、宍粟藩は六万三千石となった。城下町も西側に佐用町(西新町)ができ、賑わいをみせた。また、加封により家臣も増えていったが、寛永15年(1638)新参の小河家老系の小頭と古参の伊木家老系の足軽との口論がきっかけとなり、それが表面化して両家老の反目となった。輝澄は病のため江戸住まいであり、国許の騒ぎを収めることができず、遂に伊木家老と古参派の十一人が家族もろとも集団脱藩する事件に発展した。

幕府は家中騒動を理由に寛永17年(1640)輝澄を鳥取藩に「お預け」とし、宍粟藩主池田輝澄は二十五年間この地を去ることとなった。



▲徳川家康側室西郡の局の御廟屋=青蓮寺

山崎郷土研究会長 大谷 司郎

図書館カレンダー

□ 休館日  
【開館時間】午前10時～午後5時30分

						15	16
11月	17	18	19	20	21	22	23
	24	25	26	27	28	29	30
12月	1	2	3	4	5	6	7
	8	9	10	11	12	13	14
	15	16	17	18	19	20	21
	22	23	24	25	26	27	28
	29	30	31				

＜蔵書点検休館日＞  
11月22日(金)～11月30日(土)

さらりと描けて、まごころ伝わる

おしやれな和の年賀状  
編者/日貿出版社

毛筆で描く基本的なテクニックを、多くの写真でわかりやすく説明してある作例集。  
一枚一枚心を込めて描いた年賀状は、大切な人の心にまっすぐ届きます。



今月のオススメ

図説 伊勢神宮

編者/松平 乗昌

今年62回目の遷宮を迎えた伊勢神宮。今からおよそ二千年前からある神宮の歴史と信仰の様子を、秘蔵の神宝や絵画などの資料とともに紹介しています。



おいでよ 図書館へ



蔵書点検のため休館

11月22日～11月30日は蔵書点検・整理のため、休館します。

ご迷惑をおかけしますが、ご理解ご協力をお願いいたします。